

原典史料翻訳

国立ゴブラン製作所・制作審議委員会議事録（1909年3月2日）

岡坂桜子

はじめに

17世紀に始まるフランス国営のタピスリー工房、国立ゴブラン製作所は、1908年より美術批評家ギュスターヴ・ジェフロワ（1855–1926）を新所長に迎え、近代化を目的に刷新を図った¹。国家予算に基づく製作所の運営体制に関しては、下絵作家の選出に始まり、提出された図案の検討と承認、そしてタピスリー完成に至るまでの一連の指揮は、名目上一貫して所長の役割であったが、第三共和政成立（1870）以来ゴブランは長らく公教育美術省の管轄下に置かれており²、その運営上の方針決定は、定期的に開催される「ゴブラン製作所・制作審議委員会（la Commission de perfectionnement de la Manufacture nationale des Gobelins）」（以下、審議会）が実質的に担っていたと言って良い³。言い換えれば、所長の意向は絶対的なものではなく、むしろ複数の美術行政官、専門家、有識者で構成されるこの審議会の意向と決定こそが、ゴブランの総意として、最終決定権を持つ同省大臣ないし美術部門の政務次官へ伝えられたのである⁴。

本稿で紹介するのは、1909年3月2日に開催された審議会の議事録⁵の全訳である。議事録は現在、パリ13区のモビリエ・ナショナル（国立動産管理局）の資料室に保管される。原典は、紙の両面にインクで記され、随所に鉛筆による加筆・訂正も確認できる。この加筆・訂正を反映した議事録の最終版が作成されたことが推察されるが、現在、その存在は確認されていない。また、ジェフロワ時代の審議会議事録は当該文書しか現存しておらず、製作所運営の実態を把握できる貴重な史料と判断できることが、本稿で取り上げる理由である。

議事録には、様々な作品や人物等の固有名詞が登場する。前者に関しては、特定できたものに関しては図版として提示し、後者については現時点で判明している情報を簡潔に註で示した。これらの人物は、第三共和政期の美術行政の中核に身を置きながらゴブランの運営に関わった者たちであるが、その思想や立場、世代は様々であり、審議会が一枚岩でなかったことは容易に想像できる。その内実に関する考察は、稿を改めたい。

（凡例）

- ・翻訳にあたっては、訳者による翻刻を用いた⁶。
- ・訳者による補足は〔 〕で付した。
- ・原典の物理的な欠損等により判読不能な箇所は、適宜省略するか、〔…〕で示した。
- ・鉛筆による加筆は、【 】で示した。
- ・邦訳の段落、取り消し線は原典に従った。
- ・タピスリーの下絵を指す言葉として、原典には複数の用語「modèle」「maquette」「panneau」「carton」が確認されるが、ここではそれぞれ「モデル」「マケット」「パネル」「カルトン」とした。したがって、邦訳中の訳語と図版のキャプション中の語は必ずしも一致しない。

〔翻訳〕

1909年3月2日の審議会議事録

国立ゴブラン製作所の制作審議委員会は、1909年3月2日3時より、学士院会員ヴォドルメール⁷の議事進行の下、招集された。

出席者：ピガール＝ファープル⁸氏、ピネ氏、カルメット⁹氏、フナイユ¹⁰氏、ジェフロワ氏、ギュモ氏、ラメール氏、ラヴラン氏、マーニュ¹¹氏、L. O. メルソン¹²氏、モロー¹³氏、ペイクロン氏、ロジェ・マルクス¹⁴氏、ティエポー＝シッソン¹⁵氏、ヴァレンティノ¹⁶氏、カヴィオール¹⁷氏。

美術政務次官〔デュジャルダン＝ボームッツ¹⁸〕、ジョリー氏、ルコント¹⁹氏、サンセール²⁰氏は欠席。

前回の審議会の議事録が読み上げられ、承認された。

審議会はまず、ゴルゲ²¹氏による5点のエスキースを検討した。トゥードゥーズ²²氏のカルトンに基づき制作されたもので、レンヌ裁判所の装飾のためのタピスリー式である²³。

エスキースは総じて、〔トゥードゥーズと〕同じ色彩感覚で粗描きされたものだと確認され、前任者の色調に合わせて色の調和を図った点で、ゴルゲ氏に対し称賛の言葉が送られた。しかしながら、パネル《ジャンヌ・ド・モンフォール》(figs. 1-1, 1-2)²⁴の前景の人物と、パネル《ウェネット族》(fig. 2)²⁵に見られる若干の混同については、注意を促す余地がある。

これらいくつかの意見を考慮した上で、実物大に複製拡大する作業²⁶が求められた。

レオン・シュネ氏は2点のエスキースを提出した。そのうち1点は、前回の審議会での指示に従い、わずかに修正されたものである。1点目のエスキースに施されたシュネ氏による加筆は、審議会が満足するものではなく、ロジェ・マルクス氏は、これらのエスキースが何のためのものかを尋ねた。マーニュ氏は、これらは、おそらくポルティエ²⁷として描かれたのではないかと推測した。しかし、その大きさは不十分であるとされ、投票によりこの提案の不採用が決定された。

続いてポーバン＝ピネ夫人²⁸の手になる衝立のための2点のモデルが検討された。

カルメット氏、モロー氏、ティエポー＝シッソン氏、そしてジェフロワ氏の間で意見交換がなされた後、これらのモデルのうち丸彫り小像と花が表された1点目 (figs. 3-1, 3-2) をタピスリーにすることが、主題の輝きを欠いているというカルメット氏の意見に反して、認められた²⁹。【〔…〕とG.モロー両氏が〔カルメット氏の〕意見に答えた】

審議会は、リス川を表した【2点目の】衝立のための2点目の【このモデルの】タピスリー化を続いて延期も【の意向を決定した】。【これは製作されない】

ジャンヌ・ダルクの物語から2つの逸話を描いたマレテスト氏による2点のマケットも同様に却下された³⁰。

アノタン氏は、ウィーン大使館のための《パリのモニュメントあるいは王室の邸宅》の4枚のエスキース、つまり、前回の審議会での画家に修正が求められたエスキースを、審議会に提出した。

アノタン氏によってなされた修正は不十分であると確認され、この計画は却下された。

続いて所長〔ジェフロワ〕は、審議会に対して、国家によって注文され、タピスリーへの翻案作業が開始されたシェレ氏による《バラ》(fig. 4)のモデルを提出した³¹。

所長の提案に関して、カルメット氏、ティエポー＝シッソン氏、そしてロジェ・マルクス氏が話し合いを行った後、審議会は挙手による決を取り、シェレのような芸術家の作品をタピスリーに複製しようと試みる興味

深い企画をした所長に、賛辞を送った。

しかしながら、主要人物の手の部分の描き方と、前景の子供の靴の黄色い色については、注意する余地がある。〔靴の〕色が、肌の色調から十分区別されていないため、足に指が無いように思わせてしまう。

オディロン・ルドン氏のモデルに関して、これもまた同様に国家から注文され³²、カルメット氏とマーニュ氏によって批判されたものであるが、ティエボー＝シッソン氏は、自身が魅力的だと認めるこの構図を注文したことについて、所長に対し賞賛の言葉を向けた。色彩の調和が気に入らないとするマーニュ氏の抗議に反して、ティエボー＝シッソン氏の意見が採用された。

続けて、ヴァレットのモデル【パリ万歳】のタピスリー化が、審議会の検討にかけられた³³。ジェフロワ氏は、自身の考えでは、このモデルはフランスの諸地方に関するシリーズ³⁴の開始となり、興味深いアイデアがそこに見出せるだろうと、説明する³⁵。

続いて審議会は、メニャン³⁶氏が〔…〕を引き継いで上院議会議場の装飾³⁷のために制作した〔…〕を検討した。メニャン氏〔…〕、ツォ³⁸氏は、メニャン氏の未亡人との〔…〕によって〔…〕を継続するために、指名された。こうして審議会は、アレトゥーサ像 (fig. 5)³⁹に幾つかの細かい修正を施す許可をツォ氏に与えるため、夫人に対して必要な手続きを確認するよう、所長を促した。その〔修正箇所〕中には右側の胸も含まれ、髪にはもっと温かみのある色調が求められ、左腕はうまくはまっていなかったように見えるため、部分の描写をより簡潔にすることが求められた。

ツォ氏は、上院議会議場の装飾《三美神を従えるプシュケ》(fig. 6)を継続するためのエスキース1点を審議会に提出した。L. O. メルソン氏はその構成についていくつかの苦言を呈し、審議会は、ツォ氏にこのエスキースを修正させ、前任者メニャン氏の色調に戻させる【以前の主題にもっと合わせる】のが良いのではないかとした。

タピシエ⁴⁰氏は、リモージュ市のための《火の諸芸術》(fig. 7)のモデルを原寸大に拡大した下絵を提出した⁴¹。このモデルは、全体として、〔…〕と認められた。若干凡庸な事物が表され、ボーダーが配された〔…〕。⁴²

これらのモチーフに関しては、審議会は、このモデルをタピスリーに翻案するメリットが無いとの判断を表明した。⁴³

続いてラシュ⁴⁴氏が提出した1枚のエスキースが検討された。ボーダー部分の乏しさ〔…〕構成上のいくつかの難点があったため、審議会は、おそらくラシュ氏が自身の能力を確実に示しきれていないであろうこの案を、やむなく退けた⁴⁵。

一方で、〔…〕・デュモン氏のエスキース《ディアナと〔…〕》は、構成の着想が独創的だと認められて注目され、審議会は、さらに描きこんだ新たなエスキースを彼に提出してもらおうのが面白いのではないかとした。ただし、画家と直接話を進める限りで、とする。

審議会は、4時45分に解散となった。

続けて、審議会出席者は所長の案内で工房を訪問し、製作所の職人たちに、全員一致の賞賛の言葉を向けた。

* 本稿は2019-2020年度科研費（研究活動スタート支援/課題番号19K22999）の成果の一部です。



fig. 1-1 オーギュスト・ゴルゲ《ブルターニュ公に息子を示すジャンヌ・ド・モンフォール》1909年、マケット、油彩/カンヴァス、68×39 cm、モビリエ・ナショナル (GOB460.2)



fig. 1-2 オーギュスト・ゴルゲに基づく《ブルターニュ公に息子を示すジャンヌ・ド・モンフォール》1922年、タピスリー、556×280 cm、モビリエ・ナショナル (GOB678)



fig. 2 オーギュスト・ゴルゲ《ウエネツト族の船団に勝利するローマ海軍》1912年、カルトン、油彩/カンヴァス、545×145 cm、モビリエ・ナショナル (GOB692) (レンヌ美術館に寄託)



fig. 3-1 マルグリット・ボーバン＝ピネ《花》のためのカルトン 1900-1910年頃、油彩(?) / 紙、66×101 cm、モビリエ・ナショナル (GOB415.2) © Isabelle Bideau, Mobilier national, janvier 2019

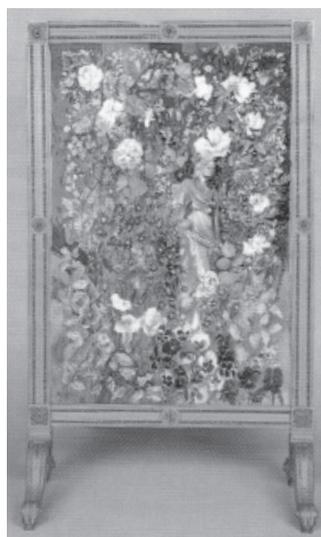


fig. 3-2 マルグリット・ボーバン＝ピネに基づく《花》1913年、衝立、138×80×42 cm、モビリエ・ナショナル (MG97)



fig. 4 ジュール・シェレに基づく《四季のタピスリー、バラ(春)》1909年、タピスリー、287×178 cm、モビリエ・ナショナル (GOB564)



fig. 5 アルベール・メニヤンに基づく《アレトゥーサ》1911年、タピスリー、325 × 217 cm、モビリエ・ナショナル (GOB604) (現所在：上院議会場、祝宴の間)



fig. 6 アンリ・ツォに基づく《三美神を従えるプシュケ》1918年、タピスリー、325 × 212 cm、モビリエ・ナショナル (GOB665) (現所在：上院議会場、祝宴の間)



fig. 7 エドモン・タピシエ《リムーザンにおける火の諸芸術》1908年、カルトン、油彩/カンヴァス (厚紙に貼付)、392 × 339 cm、リモージュ県庁 (Fonds National d'Art Contemporain [FNAC] inv. 4025)

註

- 1 本テーマに関して訳者は、博士論文にて論じた。岡坂桜子「ギュスターヴ・ジェフロワと国立ゴブラン製作所——連作『フランスの諸地域と諸都市』を中心に——」（2018年度東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程学位論文）。
- 2 ゴブラン製作所を含む国立のマニュファクチュールは、第三共和政期に入ると、公教育美術省管轄下の機関と位置づけられた。同省大臣以下、美術部門を率いる美術長官、政務次官が続き、その下にジェフロワら各製作所の所長が置かれた。ジェフロワの在任期間（1908–1926）に関しては、1905年に美術長官が廃止されるに伴い、政務次官が長官の職も担った。さらに、1917年には政務次官が廃止され、1919年に美術長官が再設置された。Marie-Claude Genêt-Delacroix, *Art et État sous la III^e République, le système des beaux-arts*, Paris : Publications de la Sorbonne, 1992.
- 3 設置は1876年。前身は、1848年、第二共和政の開始と同時に設置され、1852年に廃止された「国立マニュファクチュール高等審議会（Conseil supérieur de perfectionnement des Manufactures nationales）」。
- 4 実際には政務次官に最終決定権があったと考えて良い。ジェフロワ在任期間中の政務次官は、アンリ・デュジャルダン＝ボームツ（在1905–1912）、レオン・ベラル（在1912–1913）、ポール・ジャキエ（在1913）、アルベール・ダリミエ（在1914–1917）。
- 5 *Procès-verbal, la Commission de perfectionnement de la Manufacture nationale des Gobelins, Séance du Mardi 2 Mars 1909*, Archives du Mobilier national à Paris.
- 6 岡坂桜子「La Manufacture nationale des Gobelins sous la direction de Gustave Geffroy : documents concernant les commandes de cartons de tapisseries」、『Aspects of Problems in Western Art History（東京芸術大学西洋美術史研究室紀要）』、Vol. 17, 2019年, pp. 159–177, esp. 163–165.
- 7 ジョセフ＝オーギュスト＝エミール・ヴォドルメル（Joseph Auguste Émile Vaudremer, 1829–1914）。建築家、1854年にローマ賞を受賞し、国立美術学校教授となる。1895年に美術高等審議会（Conseil supérieur des Beaux-Arts）の委員に加わった。
- 8 ビガール＝ファブル（Bigard-Fabre, 生没年不詳）。教育・芸術事業部門長（chef de la division enseignement et des travaux d'art）を務める（在1909–1913）。
- 9 フェルナン・カルメット（Fernand Calmettes, 1846–1914）。画家、小説家。ジェフロワの前任であるジュール・ギフレ、タビスリー愛好家モーリス・フナイユ（註10）と共に、ゴブラン製タビスリーに関する総目録を編纂した。Maurice Fenaille, Fernand Calmettes et Jules Marie Joseph Guiffrey, *État général des tapisseries de la manufacture des Gobelins, depuis son origine jusqu'à nos jours, 1600–1900, 1903–1923*, 6 vols., Paris : Imprimerie Nationale, 1903–1923.
- 10 モーリス・フナイユ（Maurice Fenaille, 1855–1937）。フランスの石油事業の実業家、美術愛好家。ロダン美術館、モンタル（Montal）城、ジュエリ（Jouéry）館（現モーリス・フナイユ美術館）の援助者であり、ルーヴル美術館友の会副会長、装飾芸術中央連合副会長なども務めた。1891年から1900年にかけて、自社のポスター広告をシェレに依頼している。タビスリーに強い関心を持つかわら、ブーシェをはじめとする18世紀美術も蒐集した。
- 11 リュシアン・マーニュ（Lucien Magne, 1849–1916）。建築家、国立美術学校教授。1901年より歴史的記念物委員会の全国巡察官を務め、1904年からはサレ・クール寺院の建設にも携わった。ゴブラン審議会には1894年に加わった。
- 12 リュック＝オリヴィエ・メルソン（Luc-Olivier Merson, 1846–1920）。画家、1869年にローマ賞受賞。1892年にアカデミー会員に選出され、1906年から1911年まで国立美術学校教授を務めた。1870年代よりタビスリーの下絵を提供するなど、ゴブランとの接点を確認できる。
- 13 ジョルジュ・モロー（Georges Moreau, 1853–1934）。ピエール・ラルースの跡を継いで百科事典の編纂に携わる。
- 14 ロジェ・マルクス（Roger Marx, 1859–1913）。美術批評家、美術行政官。1883年に公教育・美術省の芸術事業部に入って以降、美術長官秘書や様々な部門での巡察官を歴任、パリ万博における美術展運営にも携わり、当時の美術行政において中心的な地位を確立する。1901年より美術高等審議会の委員に加わった。
- 15 フランソワ・チエボー＝シソン（François Thiébaud-Sisson, 1856–1944）。美術批評家。
- 16 ヴァレンティノ（Valentino, 生没年不詳）。美術政務次官の下に置かれた以下の役職に就いていた。教育・美術館部門長（chef des bureau l'enseignement et Musées）（在1905–1912）、教育・芸術事業部門長（在1913–1918）。
- 17 マルク・カヴィオール＝デュムラン（Marc Caviolle-Dumoulin, 生没年不詳）。ヴァレンティノ（註16）の下で、教育・国立マニュファクチュール部長（chef de bureau l'enseignement et manufactures nationales）を務めた。
- 18 エティエンヌ・ドゥジャルダン＝ボームツ（Étienne Dujardin-Beaumetz, 1852–1913）。国立美術学校でアレクサンドル・カバネルに師事し、画家として活動するが、後に政治家に転身し、1905年から1912年まで美術部門の政務次官を務めた。
- 19 ジョルジュ・レコント（Georges Lecomte, 1867–1958）。小説家、美術批評家。
- 20 オリヴィエ・サンセール（Olivier Sainsère, 1852–1923）。政治家、美術愛好家。同時代の芸術家を支援し、ルドンに《オリヴィエ・サンセールの屏風》（1903年、岐阜県美術館）を制作させた。1912年より美術高等審議会の委員に加わった。
- 21 オーギュスト・ゴルゲ（Auguste Gorguet, 1862–1927）。国立美術学校でレオン・ボナ、ジャン＝レオン・ジェロームらの指導を受け

- る。1883年から没するまでサロンへの出品を続ける傍ら、代表作であるドーエ市庁舎の参事会の間（通称「ゴシックの間」）の壁画をはじめ、第三共和政期に盛んになる様々な公共建築装飾事業に関わった。他方、1898年にサロン出品し国家買い上げとなった《ウェルトゥムヌスとポモナ》は、後にゴブランでタビスリーに織り上げられた（オルセー美術館、OAO275）。おそらくこれを一つの遠因として、レジオン・ドヌール勲章を受勲された1907年には、トゥードゥーズ（註22参照）の後を引き継いでプルターニュ高等法院のためのタビスリー制作に携わった（註23参照）。
- 22 エドゥアール・トゥードゥーズ（Édouard Toudouze, 1848–1907）。国立美術学校でインドル・ピルスに学び、1867年からサロン出品を開始、1871年にはローマ賞を受賞した。中世趣味を帯びたアカデミックなスタイルを特徴とし、歴史画や出版物の挿絵を制作の中心とするが、オペラ=コミック座やソルボンヌの装飾事業に関わるなかで、1890年代の主要な装飾画家として評価を得るようになる。オペラ=コミック座の天井画を高く評価したゴブランの所長ギフレの推薦によって、プルターニュ高等法院のためのタビスリーの下絵制作者となる（註23参照）。
- 23 プルターニュ高等法院の大広間（大審部）の装飾を指す。1720年のレンヌ大火と18世紀末の大革命時の破壊を受けた建物は、1898年より改修が開始された。大広間の壁画装飾として11枚のタビスリーをゴブランで製作することとなり、下絵制作をトゥードゥーズが担当することとなった。6点の下絵を完成させた後、1907年に画家が没すると、残りの5点をゴルゲが引き継ぐこととなった。ゴルゲが下絵を担当したものは以下5点：《プルターニュの寓意》（GOB614）、《荒廃したサン=テニャン祭壇の前で歩くノルマンディーの征服者、アラン振髭公》（GOB660）、《アンリ4世のレンヌ入城》（GOB667）、《プルターニュ公に息子を示すジャンヌ・ド・モンフォール》（GOB678）、《ウェネット族の船団に勝利するローマ海軍》（GOB692）。これらのうち、《プルターニュの寓意》と《ウェネット族の船団に勝利するローマ海軍》は1997年の火災で焼失した。Cat. exp., *Les Tentures du parlement de Bretagne : un décor oublié du Palais de Justice de Rennes (1887-1924)*, Musée des Beaux-Arts, Rennes, 2016, pp. 114–180.
- 24 現在のタイトルは、《プルターニュ公に息子を示すジャンヌ・ド・モンフォール》。
- 25 現在のタイトルは、《ウェネット族の船団に勝利するローマ海軍》。
- 26 エスキースを基に完成作と同寸の下絵を作成することを指す。なお、提出された原寸大下絵（カルトン）は、GOB460.1、667、581.1、463/1、692（GOB、またこれ以降に記すGMT、MGは、モビリエ=ナショナルによる作品管理番号）。
- 27 扉の代わりに垂らすドアカーテン。
- 28 マルグリット・ボーバン=ビネ（Marguerite Bauban-Binet, 1873?–après 1945）。建築家ルネ・ビネを兄に持つ。経歴に関する詳細は不明だが、ゴブランのタビスリーの修復工房で働く女性の地位向上や下絵制作者としての女性作家の起用に高い関心を持っていたジェフロワの方針の一環として、審議会でそのモデルが検討されたと考えられる。
- 29 審議会の承認を得たモデル（GOB415.2）を基に、タビスリーが製作され（GOB629）、ピエール・ルスタンによる木枠にはめ込まれ、衝立てとして完成した（MG97）。Cat. exp., *op. cit.*, 1999, p. 108.
- 30 余白部分に以下の加筆がある。【審議会は、これらのマケットが〔…〕タビスリーのためのモデルに描き起こされるとは考えていない。】
- 31 ジェフロワは、1908年7月頃より、ジュール・シェレのデザインによる家具一式（サロン・シェレ）を企画し、政務次官の許可を得てすでに製作を進めていた。ここで言及される《バラ》は、四季をテーマとするタビスリー連作の第1点目であり、製織期間は1908年9月7日～1909年11月2日（GOB564、マケットはGOB411.2）。〈サロン・シェレ〉に関する詳細は以下を参照。Cat. exp., *op. cit.*, 1999, pp. 28–31; 岡坂桜子「ギュスターヴ・ジェフロワと国立ゴブラン織製作所におけるタビスリー近代化の試み——「第一計画」を中心に——」『Aspects of Problems in Western Art History (東京芸術大学西洋美術史研究室紀要)』Vol. 14、2016年、93–105頁; 岡坂、前掲論文、2018年、58–61、68–72頁。
- 32 オディロン・ルドンに基づくタビスリー製作も、〈サロン・シェレ〉同様、ジェフロワが主導的に企画した作品群である。ジェフロワは1908年11月にはすでに政務次官に本件を提案しており、1908年12月23日から《バラ》の製作は進められていた。ルドンによるデザインを基に、最終的には、衝立《バラ》（GOB565）、2タイプの椅子計4脚（GMT25565/1、2、3、MG122）が製作された。詳細は以下を参照。Cat. exp., *op. cit.*, 1999, pp. 104–107; 岡坂、前掲論文、2018年、72–75頁。
- 33 アドルフ・ヴィレットに対する注文も、ジェフロワの発案による。本作の政務次官に対する提案は、シェレへの注文と同時期であるが、その時点では主題は四季をテーマとする連作のうちの「春」であった。しかし審議会開催直前の1909年2月15日付ジェフロワから政務次官宛ての書簡によれば、主題は「パリ」に変更された。詳細は拙稿を参照。「ギュスターヴ・ジェフロワ計画によるタビスリー連作『フランスの諸地域と諸都市』——アドルフ・ヴィレットの下絵に基づく『バリ万歳』を中心に——」『美術史』第182冊、2017年、234–248頁。註1参照。
- 34 ジェフロワが主体的に製作を推進したタビスリー連作「フランスの諸地域と諸都市」（1909～1929年）を指す。註1参照。
- 35 紙の欠損により判読不可のため、以下の部分の翻訳は省略した: *Après quelques critiques faites … à l'artiste.*
- 36 アルベール・メニャン（Albert Maignan, 1845–1908）。1864年にパリ上京後、風景画家ジュール・ノエルと歴史画家エヴァリス ト=ヴィタル・リュミネを師とし、1867年にサロン初出品以降、サロンを主たる活動の場とする。パリ万博（1889年）での金賞受賞、レジオン・ドヌール勲章の受勲（1895年）に続き、1905年には学士院メンバーとなって社会的地位を確立した。歴史画家として画業を開始し、1890年代以降には、パリ市庁舎、オペラ=コミック座、パリ8区の「慰めの聖母礼拝堂」の内部装飾事業に関わるなど、公共建築の壁画も手がけた。この時期に受注したタビスリーの下絵制作（註37参照）も、こうした画業後半期の大規模装飾制作の一環である。

- 37 上院議会議場（Sénat）の祝宴の間（Salle des Fêtes）のための壁面装飾を指す。オウイディウスの『変身物語』をテーマに、1900年から1913年にかけて8点のタピスリーが製作された。うち7点はメニャンに基づくが、画家が1908年に没したことにより、最後の1点《三美神を従えるプシュケ》（GOB665）の製作は、アンリ・ツォに引き継がれた。
- 38 アンリ＝アシル・ツォ（Henri-Achille Zo, 1873-1933）。バイヨンヌに生まれ、ボルドー美術学校の校長であった父アシル・ツォに学んだ後、パリの国立装飾美術学校でレオン・ボナとアルベール・メニャンに学ぶ。パリのサロンや「ボルドー芸術友の会」の展覧会に出品し続け、他方、万博（1900年）での銀賞受賞やレジオン・ドヌール勲章受勲（1910年）、アカデミー・ジュリアンにて教鞭を執るなど、社会的地位を確立した。オペラ・コミック座や「慰めの聖母礼拝堂」の内部装飾を手がけた。
- 39 メニャンが下絵を担当した《アレトウーサ》（GOB604）を指す。
- 40 エドモン・タピシエ（Edmond Tapissier, 1861-1943）。リヨンに生まれ、1887年より国立美術学校に入学、アレクサンドル・カバネルとフェルナン・コルモンのアトリエで学んだ。カバネル没後の同校の指導内容からは距離を置き、あくまでも伝統的なスタイルに忠実な態度でローマ賞を目指した。神話主題と夢想的な画面を好み、安定した構図と確かな素描力を示すが、同時に、明るい色調や外光に対する感覚は、印象派からの影響を免れていないことを示す。また、20年以上に及ぶタピスリーの下絵制作もタピシエの画業の特徴であり、1901年には《春の勝利》と題したマケットをゴブラン審議会に提出している。
- 41 1906年5月4日、ゴブランは、リモージュ市の新しい市庁舎内の祝祭の間に飾るタピスリーの下絵制作を6,000フランでタピシエに依頼した。審議会が採用が却下された後、当該下絵は1912年2月に公教育省の指示によりリモージュ市に寄託された。当該下絵の最終的なタイトルは、《リムーザンにおける火の諸芸術》である。なお、タピシエはその後1920年代半ばに、当該下絵の図案を下敷きとして新たに別の下絵《リムーザン》（GOB487/2、タピスリーはGOB764）の注文を受けている。ゴブランからタピシエへの注文に関する詳細は以下を参照。岡坂、前掲論文、2018年、183-191頁。
- 42 余白部分に加筆があるが、欠損部分が多く判読不可のため翻訳は省略した。
- 43 紙の欠損により判読不可のため、以下の部分の翻訳は省略した：« Le Renand et les Dindons »… à M^{lle} Lambrette.
- 44 おそらく、アンリ・ラシュ（Henri Rachou, 1856-1944）であると考えられる。ラシュは、トゥールーズ美術学校に学んだ後、パリに出てレイ・アंकタンやロートレックと親交を結んだ。1900年以降は活動の拠点を故郷トゥールーズに移し、カピートルの内部装飾の国家注文を受ける（1892年）一方、同地のオーギュスタン美術館館長や美術学校校長を務めるなど社会的地位を確立していった。初期には肖像画家として名声を得たが、1890年代半ばより画題を静物や牧歌的風景へと広げる過程で、ピュヴィス・ド・シャヴァンヌの様式に接近した。
- 45 ここでラシュが提出したエスキースは特定できないが、後にラシュは、連作「フランスの諸地域と諸都市」のうちの1点で、トゥールーズを主題とする下絵《トゥールーズの栄光》（マケット GOB443/1、カルトン GOB442、タピスリー GOB668）の制作を依頼された。ゴブランからラシュへの注文に関する詳細は以下を参照。岡坂、前掲論文、2018年、120-131頁。

[図版出典]

Cat. exp., Rennes, 2016, *op. cit.* (figs. 1-1, 1-2, 2) / Mobilier national (fig. 3-1) / cat. exp., Beauvais, 1999, *op. cit.* (figs. 3-2, 4) / 筆者撮影 (figs. 5, 6) / © Région Nouvelle-Aquitaine. Inventaire général du patrimoine culturel. P. Rivière. 1998 (fig. 7)